

心を育てる保育に繋がる保育者の関わりとは

鯨岡 峻 京都大学名誉教授

これまで「心を育てる保育」について、一貫して取り上げてきました。今回は特に「養護の働き」の核となる「受け止める」という働きについて詳しく論じ直してみたいと思います。保育の世界において「受け止める」という言葉は浸透してきましたが、その核心部分がしっかりと理解されているか疑問に思う場面に多数出くわします。

私は『人間は誕生から死に至るまで、自己充実欲求(私は私の心)と繋合希求欲求(私は私たちの心)という二つの根源的な欲求を抱えて生きている』と考えてきました。そしてこの二つの欲求が充足されるか否かによって、喜怒哀楽の(正負の)心の動きが現れ、それに翻弄されながら人は生きているのです。一人の人間は「私は私」「私は私たち」の二面の心を正負の二重に動かしています。保育する営みの中で、いかに正の自己感を強化し、負の自己感に陥らないよう配慮するかが重要です。サリヴァンの言う貶めの自己感を子どもが持たないように、私たち大人が如何に貶めの意味合いを持つ対応を子どもに向けないかが、子どもの健やかな成長のカギを握るといえるでしょう。

子どもに対する保育者の対応には『養護の働き』と『教育の働き』があります。子どもを愛しいと思い、その都度の思いをしっかりと受け止め、その存在を尊重する『養護の働き』こそ、子どもが大人を信頼する出处であり自己肯定感の源となるのです。また、子どもが少しずつ大人に近づいてきてくれることを願い、いろいろなことができるようになるように期待して、様々な働きかけをするのが『教育の働き』です。それは大人からの一方通行の働きかけではなく、子ども自身が「大人から何かを学び取って大人に近づこう」という前向きな姿勢と結びついた働きかけであるはずで

「教育の働き」の中でも、制止や禁止、叱るといった働きかけは、子どもの思いと大人の願いの方向が逆になり双方がその思いを調整し合うことが求められるため、対応が難しいと感じられるでしょう。制止が単なる大人の圧力と捉えられるか、大好きな大人の言うことだから聞こうと思えるかの違いは「養護の働き」との結びつきによると言えます。保育者の「受け止める」対応が、子どもの側の「受け止めてもらえた」という思いに繋がっているかどうか重要です。それは単に「いま、ここ」だけの働きではなく、そこに至るまでの日々の積み重ねによって繋がっているのです。

例えば、思いを受け止める言葉の後、すぐに「でもね」と保育者の願いを伝えて、思いを受け止めてもらえたと感じられるでしょうか。子どもの思いを受け止めていることが子どもに届くのを待つ、その後で「でもね」を伝えることが重要です。子どもを育てる上で、制止や禁止、叱るという「教育の働き」は必ず必要になってきます。しかし子どもの思いを受け止めているつもりの対応では、子どもの中に保育者への信頼感と自分への自己肯定感が育まれません。保育する営み(あるいは学校教育の営み)の根幹は、子どもと大人との間にしっかりした信頼関係を育むことであり、その基礎となるのが、子どもの思いを「受け止める」という「養護の働き」です。